

## 第二百五話 陸海軍統帥組織一元化模索

帝国陸海軍間の協同作戦は、日米英蘭戦の初期進攻作戦においては、概ね順調に行われた。これは事前の周到な準備、陸海軍両部隊ともに相当の練度を有し、主導権をわが軍が保持していたからである。

然しながら、その後の作戦においては、協同作戦は破綻しがちであった。特に敵が主導権をもって随時随所に攻撃し得る状況下では、機微かつ柔軟な作戦が必要とされるが、中央協定、現地協定を締結せざるを得ない協同作戦では対応出来なかった。

斯かる状況に危惧を覚えた幕僚から陸海軍統帥組織の一元化が提案されたが、それは終戦まで遂に実現しなかった。

### 1 難局打開策のための統帥組織の在り方に関する検討

陸海軍の中堅幕僚レベルで、色々な案が検討された。○陸海軍の航空を統一する案  
○陸海軍中央統帥組織の統一を含む統帥組織の統一案 ○更には陸海軍省までを統一して国防省とする案 であった。

本検討案は、上層部に報告され、陸軍首脳部は大賛成であったが、海軍首脳部は消極的であり、統合問題が進展することはなかった。海軍首脳部の陸軍に対する不信感は異常とも云える程だったとも云われる。

### 2 第一線における統合作戦について

中央における統合の検討は挫折したものの、第一線における陸海軍の指揮の統一の必要性が強く認識・理解されて、逐次に進められた。しかし乍ら、協同を本則とした伝統と組織特性上、弱点或る不全なる指揮の統一であった。

実際の統合（指揮の統一）作戦の例

○海上作戦の指揮は、海軍指揮官の下に統一されたが、陸上作戦や航空作戦の場合の指揮の統一は不徹底であったようだ。

○陸・海・空の各作戦部隊の指揮が統一されたのは、マリアナ作戦のみであった。

1945/2/25、「中部太平洋方面作戦に関する陸海軍協定」が締結され、この方面の陸海軍の指揮はG F司令長官の下に統一された。中部太平洋艦隊が新設され、陸軍第31軍司令部が新設された。残念ながら、中部太平洋艦隊司令長官は、決戦主戦力である第一航空艦隊と機動艦隊を直に指揮し得ず、依然として連合艦隊司令長官の直率のままであった。

○比島や沖縄戦では、航空、海上作戦部隊の指揮組織が複雑で、陸上部隊の指揮系統と一致せず、作戦を主宰し得る全責任者が不在であった。

### 3 本土決戦に関する陸海軍協定について

1945/4/8、「本土決戦に関する陸海軍中央協定」が締結され、7/14には、「決号航空作戦に関する陸海軍中央協定」が締結された。

既に、陸海軍部隊は破断界を迎えており、斯かる協定の実効性はあったのだろうか?何れにしても時既に遅しだ。

### 4 海軍首脳部の統帥組織一元化反対論

米内海相等の強い反対で、統帥一元化のみならず、両統帥部の同一執務場所での勤務すらも実現しなかった。残念だが、それほど陸軍不信が強かったと云うことだ。そこまで追い込んだ陸軍側にも問題があるのだろう。

\* 何れにしても、統合の必要性は理解していても、急場・急造、付け刃の統合が機能する筈もなく、ましてや相互不信があるにおいては至難の業だ。

軍種間の統合を機能させるためには、相互理解・信頼、惻隱の情が肝要であり、その構築には想像以上の時間が必要だ。